

# 明治期中学校読本教科書の編者作成教材における「普通文」其二

——新保磐次『中學國文讀本』から弘文館『中學國文讀本』への改変——

信木伸 一

## 1、本稿の趣旨

本稿は、明治期の中等教育国語教科書における「普通文」実践を明らかにする研究の一環として、読本教科書の編者自身が作成した教材（以下「編者作成教材」）を取り上げ、その文体的な試みの実践を明らかにする報告の続編<sup>\*1</sup>である。先の報告では、「編者作成教材」を掲載した初期の教科書を対象に、「編者作成教材」の文体的特徴を数量的に捉え、それぞれの教科書の「普通文」実践の位相を把握した。本稿では、先の報告で取り上げた「編者作成教材」をもとに後の教科書でこれを大きく改変して掲載した事例を取り上げ、その文体的変容を分析することで、「普通文」実践の形跡を確認する。

「編者作成教材」が、後に別の編者の手になる教科書で採録されることは、当時例のあることである。その場合、多少の字句の修正を行いつつ、出典として著作者名や教科書名を掲載するのが一般的である。ところが、一部、当該教科書の編者自身の「編者作成教材」と同様に<sup>1</sup>出典を明記せずに、先行教科書の「編者作成教材」に大幅

な改変を加えて掲載したものがあつた。本稿は、こうした改変の実際から、編者にとつてのあるべき「普通文」に近づけるための行為を抽出しようとするものである。

## 2、弘文館『中學國文讀本』における新保磐次『中學國文讀本』からの改変の実際

弘文館『中學國文讀本』（明治三四年、弘文館、以下「弘文館」）は、緒言に次のように記されている。

一 材料はなるべく諸名家の筆に成れるものより採り易より難に進むといふ原則に従ひて之れを次第せりされど排列上好材料を得ること能はずしてまゝ編者の文を挿めり（中略）

一 文章中作者の不明なるものは固より氏名を掲ぐることはずと雖も刪補の多きものは固より類ひも之れを省略したり玉を瓦をしたる誹りを恐れてなり

「編者の文」も「刪補の多きもの翻案したる類ひ」も共に、出典が明記されない点で、同様の扱いとなつてゐる。

「弘文館」の「藤樹先生」及び「太平洋の航海」は、著作者名の記載がないが、新保磐次『中學國文讀本』（明治二八、金港堂、以下「新保」）の「藤樹先生」及び「太平洋の航海」と本文の一致する部分が多分に多く、「新保」のものをもとに改変した「刪補の多きもの翻案したる類ひ」と考えられる。他に、「弘文館」の「海中の花園」も、物集高見『新撰國文中學讀本』（明治三一、金港堂）の「海中の花園」・「珊瑚島」を改変したものと考えられるが、紙面の都合で、今回の報告では割愛する。以下、「新保」から「弘文館」への教材文の改変の様態を確認する。

(1) 新保磐次『中學國文讀本』『藤樹先生』から、弘文館『中學國文讀本』『藤樹先生』への改変

資料1は、「弘文館」「藤樹先生」が「新保」「藤樹先生」をもとに改変した様態を、添削の形に加工して表したものである。

資料1 ※削除部に抹消線、追加部に傍線。改行の変更は記さず。

藤樹先生、氏は中江、名は原、通稱は與右衛門と本名、其の家の前に、大いなる藤ありて、屢其の下に、書を講ぜられしを以て、門人等稱して「藤樹先生」と云へり。藤樹先生は、近江の國高島郡小川村の人なり。祖父吉長は、伯耆の米子侯に仕へ、父吉次は、小川村に、農業を營めり。藤樹先生、幼き時より、祖父に養はれ、米子侯、伊豫の大洲に、封を移されし時、亦、祖父に従ひて移りき。

慶長十元和の頃、藤樹先生、未だ、十歳に満たず、聰明穎敏にして、早く、巴人に驚かせり。九歳の時より、常に、祖父に代はりて、書翰を作も認

むるに、文章整ひ、意味明瞭にして、覽る者、之れを奇なりとせり。十歳の時、當時、普通の素讀書なる、庭訓往来、貞永式目等を習ふに、數遍にして、盡く、之を誦誦すせり。

然れども、藤樹先生、未だ以て足れりとせず、人の為すべき所こと、猶、是より大いなる者あるべしと思へり。十一歳の時、始めて、大學の素讀を受け、

「旨」天子「以至於庶人、壹是皆以修其身爲レ本。」

といふを讀むに至り、曰はく、「幸ひにして、此の書の存せありあり。聖人、豈、學びて至ることを得ざらんや」と、感激して、涙下り、衣をの需すふを知らざりき。斯くてこの後、諸書より、苟くも、訓戒となるべき語をある時は、之れを寫し取りて、壁に貼り付けて、日々、之を力め行ひまたり。昔の漢學は、唯、其の文章を學ぶに止まりしが、慶長十、元和の頃、藤原惺窩、其の門人、林羅山など、始めて、漢學を以て、人たるの道を講じ、トゼり。藤樹先生は、則ち、實踐躬行とて、人々を、力めて、之れを身に行ひ、自ら、聖賢の位域に、到らんことを期せしめられたり。

當時、戰國の氣風、未だ、全く去らず。大洲の士、皆、武を尚び、文を卑しみて、書を讀み、講を聴くことを屑しとせずざりき。故に、藤樹先生、書は、衆人と共に、武を講じ、夜は、則ち、燈火に對して、書を讀むこと忠ならずを勉めたり。此くの如きこと數年にして、大洲の士人、藤樹先生の言行に感じず、往々往、學に志す者あるに至れり。

藤樹先生、又、孝心、甚だ深く、かりき。少年の時、類に祖父母を喪に別れ、十八歳の時、丈故郷の父を失ひトぬ。歸りて葬らんと欲すれども、事故ありて果たされず。是れは由よりず、已に、任仕官を厭ふ心ありき。其の後、母を大洲に迎へて、養はんと思ひしも仕へんとせられけれども、

母、故郷を去ることを悦ばざりしかば、屢上書して、致仕して歸養せん仕を辞せんことを請ひしかば、はれぬ。然れども、藩侯、其の人と爲なりを重んじ、且、他藩に仕へんことを惜しみて許されざりき。斯かる程に、侯の弟、分家して新谷侯たるに至り、藤樹先生を新谷同侯に、附けられたり。一日、藤樹先生書を讀みて、

「樹欲、靜而風不<sub>レ</sub>止。子欲<sub>レ</sub>養而親不<sub>レ</sub>待。」

といふに至り、母を念ふ心止め難く、遂に、意を決し、辭せずして官を棄てて歸り去りぬ。現在の俸米は、盡く、倉に藏めて封印し、現金のみを以て、諸の負債を償ひ、餘す所の錢三百文ありければ、二百文を、僕に與へて歸らしめ、己れは、百文を以て、遂に小川村に歸りまされり。かくて、母に侍養するの志しを果たし傍ら、東近傍郷の子弟を集めて、學問を授けたり。

藤樹先生、多年の勉強空しからず、其の博學學博く、古今に通じ、兼ねて醫學、佛書にも深かりき。其の德行に於ては、唯、其の門人のみならず、延まいて、郷里郷黨を感化し、人人、道に、遺したる物を拾はず、夜、戸を鎖さず、ざるに至れり。世間、傳へて、近江聖人と呼べり。

藤樹先生の友に、大野某といふ者ありき。其の子了佐の愚鈍なるを以て、鄙人の業を授けんと欲せり。了佐、之れを恥ぢ、泣きて、藤樹先生に請ひて醫學を受けんと欲すことを請へり。藤樹先生、乃ち、之れに素讀を授くるに、僅かに、數個箇字を教ふるに數百遍、食頃暫くにして、又忘れ、更に教ふること數百遍にして、翌日にして、又忘られたること拭へるが如し。而してされど、藤樹先生は、諄々諄々として、教ふまじとて倦まず。了佐、遂に、醫を以て、身を立つるに至れり。藤樹先生、或る時、門人に謂ふ語りて「吾れ、了佐の爲に、於て殆ど、精根を盡つし了はりへ

ぬ。然れどもさりながら、彼れが、勉強して倦まざりしを以て、遂つひに、是に至ることを得たり其の志しを遂げたり。了佐、猶なほ然り斯くの如し。況や、了佐ならざる者ものをや。二三子、才それを勉めよ。」と謂はれきとぞ。

嘗て、加州の飛脚あり。官金二百兩を管かり携へて、江州を過ぎ、途に、馬を備ひ、榎木驛に至りて宿すれり。馬夫は、河原市の村人なりき。此の夜、家に歸りて、馬の鞍を卸さんとしすけるに、忽ち思ひも懸けず、彼の飛脚の、金囊を遺れたるを見下出したり。驚きて、晝夜馳せし夜ともいはず、直ちに、もとの榎木に至りて、才を其の主に戻すせり。飛脚、謝して曰はく、「若し、此の金を失はば、罪、妻子にも及ばんものを。」とて喜びて、別に、金十五兩を出だす。これは、心許りの禮なりと、馬夫を賞すれどもに與ふれども、馬夫受けず更に受けんともせず。乃ち、減じて十兩と本しに減じ、五兩と本し、三兩と本しに減じ、遂つひに、二分に至りぬ。馬夫の曰はく、「奴、若し、此の金を喜ばずお程ならば、豈、最初より、二百兩を還さんしまらせんや。然れども、厚意背き難がたし。幸に即ち、錢三百文を賜はりて、今夜の賃とせん。」といふ。飛脚、感歎して曰はく、「抑々君は、如何なる人ぞ。」曰はく、「奴、豈、名ある者ならんや。唯、奴が近傍郷に、與右衛門と云ふ人あり、常に、人に教へて、吾人の物は取らぬものぞ。」と云へり。とて下辭して而して去りぬ。

熊澤次郎八、其の頃は、年、猶なほ若かりしが、此の話しを聞き、是れこそ、眞の儒者なれ。」とて、往きて、教へを受けんことを請ふ。へるに、藤樹先生、「吾が學徳、未熟なり未だ熟せず。」とて許されず。然るに、次郎八苦むに請ひて已まず、門に立ちて去らざること二日に及べり。藤樹先生の老母之を憐みて、爲めに言ふ所あり先生に説き、乃ち漸くにして許

されて、入りて、弟子の禮を取とれり。是れ、即ち、後に、備前の名臣として、大名を、天下に轟かしたりし熊澤了介なり。藤樹先生の、常に言行を慎みまれしは、いふも更止言を俵はずなり。その一二をいへば、もし、國主の、外に出行あも出でらるることを聞けば、遽しと雖必ず、其の方に向かひて拜すせり。又、弟子、履を進むれば、必ずまづ、之れを手にし請け取りて辭謝す謝せり。其の温恭謙讓、常に、此くの如しと雖も、偶ま一旦、事あるに方りては、其の勇氣の決然たること、萬夫も犯すべからざる者ものありき。

藤樹先生、或る時、某の地に行き、歸途偶ま夜に及ゆりびて歸られぬ。途に、盜賊數人ありて、藤樹を襲して金銭・衣服を剥がんぎとらんとす。藤樹先生、暫く黙考して、徐かに、曰ふやう、「我れ熟思するに、曾て、之れを、汝等に與ふべき理なし。若し、理不盡に取らんとせば、我れは戦ふあはんのみ。然りと雖も、戦ふ者は、必ず、互ひに、名乗るを禮とす。我れは、是れ、近江の中江與右衛門なり。」といふ。盜賊等、之を聞き、慚愧拜伏して曰はく、「奴等、人外の生を營み、猶且、近江聖人十の名を聞くこと久し。圖らざりき。今茲に、聖人を犯すまよあゆんさんとは。」といひて、深く、之れを謝せり。藤樹先生、因りて、懇ろに、人ゆたる道を説き教へけるに、賊等共、皆、其の誠意に感じて、終に、良民となりまれりといふ。

又、曾て、軍陣を談ずる時、箭を避くるの法を語る者ありき。藤樹先生曰はく、「余が箭を防ぐは、唯、直ちに進みて避けざるに在り。試みに、射を習ふ者ものを見よ、的に中あたる者もの、極めて罕れにして、おほくは中たらざる者多し。若し、吾れに中たる者あらば、千萬中の一枚にして、是れ命なり。罕れに中たる位地を避けて、多く幸あたる位地に向ふは、

是れ、中たるまじき箭に中たる所以なり。」といへり。其の、沈勇にして、遲疑せざること、概ね、此くの如し。

藤樹先生、平生、多病なりき。故に、著述頗る多しと雖も、遂げずして止みぬる者もの亦多し。一日、病ひ、革まぢり急なる時、端坐して、門人を召して、嘆じきて曰はく、「吾れ死せば、誰れか、能く斯の文を以て任ずる者ぞ。」と言ひ畢はりて、遂に、卒すせり。時に慶安元年八月二十五日、小なりき。享年四十一。門人等相會し、儒者の禮を以て、小川村の玉林寺に葬りぬれり。鄰里郷黨遠近、皆、老を扶け、幼を携へ、涕泣して、柩を送るまじ親を喪すが如くなみまれりとぞ。其の住せし所の藤樹書院は、長く、後世に保存せられて、國主と雖も必ず、禮服を着けさせれば、然る後に入ゆらざるを例としたりき。

右資料における改変の行為を整理すると、次のように分類できる。  
【文を短く切る】●文法的な文末に読点が付くなどして文が続いている箇所を、「歸られぬ。」のように修正したもの26例。●句の続く箇所ので「講じ、ぜり。」「請ひしかど、はれぬ。然れども」のように文を切ったもの5例。

【文を続ける】●二文を続ける「請ふ。へるに。」。

【読点の使用】●「新保」117、「弘文館」357箇所。

【格助詞・係助詞の使用】●「が」の削除「彼れが。」。●「の」の追加「馬夫の曰はく。」。●「を」の削除「それを勗めよ。」。

【助動詞使用の変更】●「る」・「らる」の追加「講ぜられし」等。●「き」の追加「せずざりき」等。●「ぬ」の追加「至ありぬ。」等。●「き」から「ぬ」へ変更「請ひしかど、はれぬ。」。●「り」の追加

「誦誦せり。」等。●「き」から「り」へ変更「なりまれり」。●「ぬ」から「り」へ変更「葬りぬれり」。●「たり」の追加「轟かしたりし」等。●「き」から「たり」へ変更「行ひまたり」等。

【句末の接続表現の変更】●「て」の追加「付けて、」等。●「て」の削除「感じて、」等。●「にして」(断定)に「+接続助詞「して」」の追加「聰明穎敏にして」等、「にして」(格助詞)に「+サ変動詞「し」+接続助詞「て」」の追加「數年にして」等。

【表記の変更】●「の」の非表記「近江の國」。●「の」の追加「馬の鞍」。●漢字表記から仮名表記へ変更「由より」、「爲なり」、「畫つくし」、「遂つひに」、「猶なほ」、「者もの」、「之それ」、「難がたし」、「取とれり」、「中あたる」。●漢字の変更「數箇箇字」等。●踊り字の使用「諸々」等。●踊り字の不使用「人々人」、「棄てて」等。●送り仮名の追加「之れ」、「是れ」、「彼れ」、「我れ」、「或る」、「吾れ」、「誰れか」、「必ず」、「雖も」、「互ひに」、「懇ろに」、「罕れ」、「幸ひ」、「言ひ畢はりて」。●送り仮名の削除「中なる」。●清濁音の訂正「殆とど」、「遂げけず」等。●会話文中の会話の引用符「『』」を「『』」に変更。●「内の最後の句点の削除」例(※削除なし1例あり)。●並列関係のものを中点で区切る「金銭・衣服」等。

【表現の変更】●内容に相応しく言い換え「藤樹先生」、「聖賢の位域」、「慮らずを勉めたり」、「任仕官」、「兼はんと思ひしも仕へんとせられけれども」、「近傍鄰」、「戸を鎖さず、ざるに至れり」、「食頃暫くにして」、「是に至ることを得たり其の志しを遂げたり」、「然り斯くの如し」、「忽ち思ひも懸けず」、「罪、妻子にも及ばんものを」、「馬未受けず更に受けんとせず」、「若し、此の金を喜ばずぶ程なら

ば、豈、最初より、二百兩を還まんしまゐらせんや」、「若ちに請ひうて已まず」、「偶ま一旦」、「多く至るあたる位地」、「禮服を着著けずざれば、然る後に入らざるを例としたりき」等。●省略語句の追加「幼き時より」、「至ることを得ざらんや」、「衆人と共に」、「と謂はれきとぞ」、「といふ」、「といへり」等。●理解を助ける情報の追加「訓戒となるべき語がある時は、之れを寫し取りて」、「彼の飛脚の、金囊を遺れたるを見下出したり。驚きて、「直ちに、もとの榎木に至りて」、「二日に及べり」、「手にし請け取りて」といひて、深く、之れを謝せり」等。●必要でない情報の削減「早く、巴に人を驚かせり」、「辭せずして官を棄て」、「柩を送ることを親を喪するが如くなりまれりとぞ」等。●同語の繰り返しを避ける「新奈同侯に」。●簡潔・平易に言い換え「減じて十兩となしに減じ、五兩となし、三兩となしに減じ」、「爲めに言ふ所あり先生に説き、「病ひ、革まれり急なる時」等。●形式名詞及びその省略の不使用「此の書の存せありあり」、「戦ふあるはんのみ」、「犯すことありんさんとは」。●漢文訓読表現の追加「苟くも、訓戒となるべき語」、「是れ、即ち」。●漢文訓読表現から和文表現への言い換え「衣をの露すふを知らざりき」、「博學學博く」、「請ひて醫學を受けんと欲すことを請へり」、「星夜馳せて夜ともいはず」、「乃ち漸くにして」、「いふも更に書を俟たずなり」、「死せなば」、「誰れか、能く斯の文を以て任ずる者ぞ」、「鄰里郷黨遠近、皆」、「住せしし所」等。

(2) 新保磐次『中學國文讀本』「太平洋の航海」から弘文館『中學國文讀本』「太平洋の航海」への改変

資料2は、「弘文館」『太平洋の航海』が「新保」『太平洋の航海』をもとに改変した様態を、添削の形に加工して表したものである。

資料2 ※削除部に抹消線、追加部に傍線。改行の変更は記さず。

頃しも七月半ば過ぎ暑氣いと烈しくてコレヲ病ま下漸く蔓延の兆ありとて人々其の豫防に心を苦しめ居たる折柄、廿三日と云ふに亞米利加之の便船ありければ、其の田の眞晝頃海外に、行くべきこと、出で来て、八月某の日の某の時、東京なる我が家を立ち出でて、家族・知友に送られず、横濱に到り、波止場にて、人々人と相別かれて、沖に繫かれる蒸氣船、某の號に乗り込みぬ。

此の船は、亞米利加之の合衆國への便船にして、つねに、同國と日本・支那との間往來する飛脚船なり。大海原を渡る船なれば、其の構へ、いと甚だ大きにして、船より艦まで、凡そ、四十間計りもありまじ覺ゆあるべし。作りは三層にして、底には、荷物を積み、中の層にも、荷物はあれど、主として、下等客を入れ又荷物をも積みゆたり。上の層には、上等客の室、數多ありて、其の前後を、甲板とす。船の方の甲板には、生きたる牛・羊・下・鶏などを、檻に入れて並べたり。是れは乗客、及び、船人の食物にする料なりとぞ。艦の方の甲板は、上等客の遊歩場なり。上等客の室の上に、猶一層ありて、此ここには、船長の室と、楯取りの楯を取る所とありまじ職室とを構へたり。

さて午後四時にもやなりぬらんと思ひし頃、一時間ばかりありて、船は、錨を上げて、汽笛を鳴らしゆつて、動き出でぬたり。抑々今より、行くべ

き方は、會かつて、書物に讀みの上、又人の話にてこそ、見もし、聞きしのみなるよその國々なればもしたれど、未だ、目のあたりには、知らぬ國國なれば、まのあたり見まほしと思ふ心は切なりしかどもなつかしく嬉しきもの、さて、今はとて、住みなれし故國を後にして、唯獨り知らぬ果國に向かひ、海上萬里の旅路に就まける時出で立つは、益荒猛男など、思ひ誇れるにも似ず、心細きも、悲しきまもは、さまませ得も云はれざる心地がせられける人情の自然なるべし。

甲板に出でて、舷に寄より掛かりゆつて、遠ざかり行く横濱の景色を、見えずなるまで飽かず眺め居たりしたる間に、日も早暮れなるとして、いつしか、浪に入りて、房・總・豆・相の山々山も、暮色蒼然として次第々々次第に消えて行く、影暮れて、別れを告げたり悲しきも一しほなりゆり。

稍ありて我のと定められたりし室に入りて、先づ其の内の様を見るに、我が室のは、濶廣さは、僅かに、二畳敷計ばかりなるに、狭き小さな床臺二つ重ねたるありて、傍らに、室の半ばを塞ぎ、残る半ばには盥漱の道具など置きたる故さへ備へたれば、荷物を持込みたればも、置き難きほどにて、坐すべき餘地はなかりけりもなし。寢臺二つありしを見れば、二人の客を、入るべき室なりしならんをるべけれど、幸に乗客やの少なかりけんきにや、我れ獨り此の室を相領しけるこそと定れるは、責せめての事と嬉しかりけれもの幸ひなり。翌日朝、と疾く起き出でて、来し方遙かに眺むれを願れば、我が國は早見えず、唯、兎ゆる限りは水と雲、何れの方にも陸地は見えずりけりとの外には、目にかがるものもなし。

まればはじめのことなれば、此の大海原の景色、いと殊に面白く心暗々としてめづらしく、愉快極まりなかりまなること、水の果てなきがごとし。

然れどもされど、名にし負ふ高き太平洋を、横ぎり渡ることなれば、是より、十餘日の間の虫茫々たる蒼海の波の上を、雲より出でて、又雲に入りつゝ、走せ行まければ、田毎々々同じ景色には、目も倦み、心も疲れけりたり。偶まゝ鯨の潮吹くを遙かに見およぼあり、或は海豚の、船に驚かされて、群れつゝ波の上へ飛び躍り出すつゝ、づる連げ行くを見ることもあり、或又は、アルバトロスと云ふ鳥の、船を追ひて飛び來ることもありなどあるは、斯かる手にも取れざる魚鳥なれども時に取つてはいと興を催し、旅の憂苦聊か、旅情を慰むること大方なれりまこといふべし。

由には見馴れざる景色を見、身には着馴れざる衣服を着、口には食ひ馴れざる食物を食ひ、耳には聞き馴れざる言語を聞き、寝るまへ馴れぬ床なれば、苦しきはいと切なりしかど、幸に風雨穏やかにして水面鏡の如くなりしかば、病むことは絶えてなかりけり。

船は、日本を離れてより、次第に、東北に向かひて進みしかば、日ごとに、寒氣漸く加はりて、十日冊を経たる頃には、全く、冬の氣候となりて、雪にさへ遇ふ降り出でぬ。東京を、立ち出づる時は、夏の最中なりしかば暑氣、最も甚だしかりしかば、衣服は總べて夏服をのみ用意したりしにぞ冬の服など、用意はしたれど、忽ちに、此のかかる寒冷にはいと困しむしあはんとは、思ひもかけざりき。

是れより、船は、更に、東南に向かひて進みしかばたれば、暖氣、又漸く加はりまぬ。斯く、船の、北に進みて、又、南に進む行は、迂回するが如くやうなれども、實は、迂回するに非ずして却りて、近路便路を取れるなり。そはいふまでもなけれど、地球の形ち圓くして、其の周圍は、赤道直下に於て、最も廣く、赤道より、南北に至るに隨ひて、漸く狭くなる故に、赤道に近き所處を、東西に乗り切るも、少しく、北、又または、南の

方に回り行くも、路行程に大差はなままりし。然る上ことに、黒潮と云ふ海中の流れは、我が國の東岸より、東北に向かひ、更に、又東南に向かひて、亞米利加大陸の西岸まで流れ行まけば、八重の潮路など去つて其の流潮勢も、極めて早ければく、船をも、此の間に入れて行る時はこれに隨ひて、潮のまにまに速かに馳せ行く走ること最も速かなり。さればこそ、是れを、我が國より、亞米利加への大道海路とはするなれせるなり。

横濱を出てより、早十六日にはもなりぬるにを経たれど、陸は、未だ見えざりければしに、倦み疲れて其の夜も早く寝たりしかど、來り方行く末の思はれて夢現ともなく夜を更かし、曉方がたは、至りてやう々々寝入りたりしに、急がはしくあわただしく、室の戸を敲く者ありけり。驚き覺めて、「何ぞ」と問へば、「今朝こそ、陸は見え候へゆれ。早く、甲板に出てきて見給へや。」と云ふに、嬉しくして飛び躍り起きつて、衣服改めて、急ぎ甲板に至るれば、多くの人々人も、既に出てきて、行くす向うの方を指まざしつゝ、書り居たりま相よろこべり。

まだ、明けやらぬしのよめの横雲の下に昏かに黒く山の連なれる形見えぬ。あれかと計りにて空も、ほの暗ければ、雲とも山とも、また確かには、見分けられねば、難し。且信じ且疑ひつゝ暫し眺め居たる程に、左は次第に、浪も白み渡りて、いよいよ、山の形ち漸く明かになりて疑ひは雲と共に霧氷たるに、現れたり。又海士の酌釣り舟なるか、にや。二艘、三艘、五艘、六艘と、次第ここ、かしこに見えしかばゆゆ。今は陸地に近づきたるよと疑ひなれど小躍りしつゝ喜びけりうれしきこと限りなし。程なく上陸すべしとて即ち、室に歸りて、まづ、荷物を整へ、朝食を終へて、土を再び、甲板に出でて、上陸を待てり。陸地の方を見渡わたせば、一帯の山脉、海に接して連なり、港は何處とも見えざるはれども、船は、仍なほ、其の方

向を變へずして山の方に、向かひて進み行まけり。いと怪しと思ひながらふ程に、其の有らん様を見んとて、船の山に近づくを待つ程に、下やがて、其の山と山との間に、狭き瀬戸の見あらはれて、船は此の瀬戸より、船に進み入りぬ。これ、は是即ち、名にし負ふ黄金門と云ふ瀬戸なりけり。兩岸の丘陵を見渡せば、紅花・緑樹の類は、絶えて見えず。土石は、皆、暗黒赭色を帯びたるに、何と云ふ名も知らぬ灌木にやあらん、黒ずみたるが、一面に生ひたりける。丘腹には、處處に、又白まくして、四角な家、かしこに立たちたり。其の景色は、全く、我が國にて見お所の者と異なりければ、此の時我は實に、我が身の、別天地にも來れるよまを遊べるかと思おほえたりま。

右資料における改変の行為を整理すると、次のように分類できる。  
**【文を短く切る】** ●もと文法的な文末に読点を付いていた箇所を句頭に修正「入れ又衝物をも積めりたり。」、「今朝こそ、陸は見え條へ、ゆれ。」等。

**【文を続ける】** ●二文を続ける「よまもあり。などあるは、」と云ふに、「」等。●文法的に正しく続ける「飛び躍り起きまて、」。

**【読点の使用】** ●「新保」89箇所、「弘文館」234箇所。

**【格助詞・係助詞の使用】** ●「に」を「を」へ変更「間仕を往來する。」。●「に」の削除「暁方がたに、」。●「を」の削除「などを、檻に入れて、」から係助詞「も」へ変更「船をも、」。●「も」の削除「流潮勢も、」。●「は」の追加「同じ景色には、」。

**【助動詞使用の変更】** ●「き」から「たり」へ変更「向かひて進みし  
 べたれば、」。●「けり」から「たり」へ変更「疲れけりたり。」。●

「ぬ」から「たり」へ変更「出でぬたり。」。●「き」から「ぬ」へ変更「加はりまぬ。」。●「けり」から「き」へ変更「見えざりければしに。」。●「き」の不使用「覺えおほえたりま。」。●「けり」の不使用「瀬戸なりけり、」生ひたりける。●「なり」の不使用「大差はなまなゆし。」。●【句末の接続表現の変更】 ●「つつ」から「て」へ変更「鳴ゆしゆて」等。●「に」から「ば」へ変更「至るにれば。」。●「ば」の追加「流れ行まければ。」。●「ば」の削除「早ければく、」。●「ば」から「に」へ変更「見えざりければしに。」。●「に」から「ども」へ変更「見えざるにれども、」。●「て」の追加「加はりて、」等。●「て」の削除「送られて、」等。●「して」の追加「白まくして、」。

**【係り結び】** ●係り結びの不使用「此の室を押領しけるよまと定れるは、東せめての事と嬉しかりけれもの幸ひなり。」、「さればよま、（中略）すまなれせるなり。」。

**【敬語の変更】** ●敬語の不使用「見え條へ、ゆれ」、「甲板に出でて見給へや。」。

**【表記の変更】** ●漢字表記から平仮名表記へ変更「此ここ」、「曾かつて」、「審より」、「計ばかり」、「責せめて」、「又または」、「暁方がた」、「見渡わたせば」、「仍なほ」、「見あらはれて」、「覺えおほえ。」。●仮名表記から漢字表記へ変更「と疾く。」。●漢字の変更「赤道に近き所處」、「酌釣り舟」、「土土再び。」。●踊り字の使用「抑々」等。●踊り字の不使用「人々人」等。●送り仮名の追加「是れ」、「我れ」、「飛び来る」、「取れるなり」、「形ち」、「最も」、「僅か。」。●送り仮名の削除「別かれて」、「掛かり」、「加はり」、「向かひて。」。●清濁音の訂正「指まざし。」。●引用符の追加「何ぞ」と問へば。●並列関係のも

のを中点で区切る「家族・知友」等。●並列関係のものを一語にまとめる「牛、羊、豕、鶏」。

●同語の繰り返し回避「同國」

【表現の変更】●内容に相応しく言い換え「底には、荷物を積み、中の層にも、荷物はあれど、主として、下等客を入れ又荷物をも積みゆりたり。」「海上萬里の旅路に就まける時出で立つは、」日も早暮れんとし、いつしか、浪に入りて、」忽ちに、此のかかる寒冷にはいとイヤ困しみあはんとは、思ひもかけざりき、」近路便路、」路行程、」流潮勢、」潮のまにまに速かに馳せ行く走ること最も速かなり、」大連海路、」空は次第に、浪も白み渡りて、いよいよ、」いと怪しとは思ひながらふ程に、」別天地にも来れることを遊べるかと覺えおぼえたりま」等。●理解を助ける情報の追加「亞米利加の合衆國への便船にして、つねに、」凡そ、四十間計り、」料なりとぞ、」未だ、目のあたりに、知らぬ國なれば、まのあたり見まほしと思ふ心は切なりしかどもなつかしく嬉しきものの、」益荒猛男など、思ひ誇れるにも似ず、心細きもく、」まればはじめてのことなれば、此の太海原の景色、いと殊に面中へ心皓々としてめづらしく、愉快極まりなかりまなること、水の果てなきがごとし、」十日甲を經たる頃、」東の最中なりしかば暑氣、最も甚だしかりしかば、」極めて早ければ、」急ぎ甲板に至るれば、」まづ、荷物を整へ」等。●必要でない情報の削減「作りは三層にして、」稍ありて我のと定められたりし室に入りて、先づ其の内の様を見るに、我が室のは、」十餘日の間の果茫茫たる蒼海の波の上を、雲より出で、又雲に入りつゝ、走せ行きければ、田毎々同じ景色には、」迂回するに非ずして却りて」等。●簡潔・平易に言い換え「四十間

計りもありまど覺ゆあるべし、」心細きもく、悲しきまもは、ましませて得もまはれざる心地がせられける人情の自然なるべし、」春色蒼然として次第々次に消えて行く、影暮れて、別れを告げたり悲しきも少しほなりけり、」唯、兎ゆる限りは水と雲、何れの方にも陸地はみえざりけりとの外には、目にかかるものもなし、」旅の憂苦聊か、旅情を慰むること大方ならざりまともいふべし、」雪はさへ遭ひ降り出でぬ、」單十六日にもなりぬるにを經たれど、」患がはしくあわただしく、」雷り居たりま相よろこべり、」山の形ち漸く明かになりて疑ひは雲と共に霽れたるに、現れたり、」明けやらぬしのもめの横雲の下に昏かに黒く山の連なれる形見ぬ。あれかと計りにて空も、ほの暗ければ、雲とも山とも、まだ確かには、見分けられねば難し、」今は陸地に近づきたること疑ひなしとて小躍りしつゝ喜びけりうれしきこと限りなし、」尙とま本名も知らぬ灌木にやあらん」等。●漢文訓読表現の追加「これ、は是即ち、」等。●漢文訓読表現から和文表現への言い換え「日ごとに、寒氣漸く加はりて、」迂回するが如くやうなれども、」漸く狭くなる故に、」然る上ことに」等。●和文表現から漢文訓読表現への言い換え「いと殊に、」いと甚だ、」他に「いと」の削除5例。「名にし集ふ高き、」進み行きけりす」。

### 3、考察

「新保」は文法的な文末に読点を付けるなどして文を続けるという特徴があるのだが、これは内容のまとまりで句点を付けて一文とす

るといふ方針で行われていると考えられる。<sup>\*2</sup>「弘文館」では文法的な文末はすべて句点を付けるよう修正されており、この「新保」の試みは、継承されなかった。なお、表現を書き換えて、二文を続けた箇所が3例、読点で続いていた箇所を文を切った箇所が6例あり、内容のまとまりの範囲についての判断の違いが表れていると考えられる。読点は、「新保」から「弘文館」へ資料1で3.1倍増、資料2で2.6倍増と大幅に増加しており、意味のまとまりを明確にすることで、理解しやすい文にすることが意図されたと考えられる。

格助詞・係助詞の使用については、追加・削除・他の助詞への変更など、どれも改変前後でほとんど意味内容の変わらない変更で、語句の続け方のリズムが編者の感覚に合うよう調整されたものと考えられる。

助動詞については、時制に関する助動詞、特に完了の「り」や「たり」の使用が増えており、場に相応しく豊かに使い分けるようにしていると考えられる。

句末の接続助詞は、「つつ」から「て」への変更、「に」から「ば」へ変更、「は」の追加、「に」から「ども」へ変更など、いずれも前後の文脈を把握し易くする意図でのものと考えられる。

「こそ」を使用しないようにした例は、「は」に置き換えられたものなどで、「こそ」から文末までが長いために改めたと考えられる。「こそー已然形」の使用例はある。

敬語の使用が削除されたのは、いずれも会話文中であり、会話内容を伝えることだけを目的とした簡潔な表現になっている。

漢字・仮名表記については、漢字表記から平仮名表記へ変更され

たものが多いが、これらは仮名表記の方が読み解く労力が少ないと判断されたものと考えられる。一方で、例は少ないが、仮名表記から漢字表記へ変更されたものもあり、これらは漢字の方が意味が理解しやすいと判断されたものと考えられる。漢字の文字変更は、より適切な字と判断されたものと考えられ、正確な表記への志向がうかがえる。

踊り字「ゝ」が付け加えられているのは、「屢ゝ」や「抑ゝ」のように、漢字自体が豊語で読むものの場合で、読みを補助する目的で付けられたと考えられる。「々」や「ゝ」を使用せずに語を明記するのは、読み手が踊り字を前の字に変換する労を省いている。

送り仮名については、「取れるなり」・「最も」など、送ることで読みが明確になる箇所を送り、「別かれて」・「向かひて」など、無くても読みが分かる箇所は削除している。

清濁音、引用符、並列関係の示し方、「」内の最後の句点などの用法の違いは、正書法に揺れがあった状況を示している。

同語の繰り返し回避は、簡潔な文章を志向するものと言える。内容に相応しく言い換えたものは、その場に相応しい現今の表現にして、正確・明確に事柄を表すことを目指したものと考えられる。

表現を追加する形の変更は、読み手が言外の意味を補う労力を省いて読みやすくするためのものと考えられる。「とぞ」・「といふ」や「時」・「こと」などの語句を追加している例や、理解を助ける情報を追加した例がこれにあたり、読み手が理解しやすい文を作ろうとしている。

表現を削除する形の変更は、文章の本筋から見て必ずしも必要で

ないと判断された情報を削除したと見られるもので、余分な読みの労力を費やさせない簡潔な文を作ろうとしている。

表現を簡潔・平易に言い換えたものは、内容理解に解釈の手間がかからない文を目指したものと考えられる。

漢文訓読表現は、「苟くも」や「是れ、即ち」等、他テキストにも頻出するような当時一般に流通していたとおぼしきものが追加されている。「請ひて醫學を受けんと欲すことを請へり」のように漢文訓読表現を平易な表現にあらためたものも見受けられる。

漢文訓読表現から和文表現へ変更されたものは、漢語を和語にしたり漢文句法を使わない文にする等、平易な表現を求めているものと考えられる。「いと」が削除された他、和文の類型的な表現「名に↓集本高き」の言い換えが行われる一方で、「いふも更に書を俵たずなり」などは使用されている。和文表現の使用については、これも、平易な表現にする志向があると考えられる。

資料1・資料2ともに非常に多くの箇所で見え加えられているが、目的は文体的な改良を施すことであつたと考えるなら、その改良の方針は、読み手が理解しやすくすること、加えて正確・明確に事柄を表すことの二点にある。

なお、三土「中學國語讀本」(明治三四年、金港堂、以下「三土」)「近江聖人」も、著者名を記さず、新保「中學國文讀本」「藤樹先生」を改変している。<sup>\*2</sup>「三土」は、「弘文館」ほど改変箇所は多くないが、読点の追加や表記の変更など同様の改変が行われている。ただし、表現の変更については、漢文訓読体で使用される表現から和文体で使用される表現への改変が語句レベルで見られるものの、内容に相

応しく言い換えたものや、理解を助ける情報の追加、必要でない情報の削減等、大幅な表現の改変はなされていない。また、「三土」では、正確・明確に事柄を表すための改変は見られない。読み手に理解しやすきようにする改変も「弘文館」がより積極的である。

「弘文館」における改変のねらいは、教科書の教材文を生徒にとつて読みやすくまた正確に内容を伝えるものにする<sup>2</sup>ことよりも、生徒の書く文章の規範として、多くの人に分かりやすい、事物を正確・明確に表すことのできる文体を提示することに重きがある<sup>3</sup>と考える。平易さと正確さ・明確さこそは、「普通文」の要件である。本稿で報告した事例のように、近代国語教科書教材には、新しい時代の言語規範を示そうとした試行錯誤の跡が見て取れる。

#### 【注】

\*1 信木伸一「明治期中学校読本教科書の編者作成教材における『普通文』―新保磐次『中學國文讀本』・落合直文『中等國文讀本』・塩井正夫『中學國文』・物集高見『新撰國文中學讀本』の場合―」(『国語教育研究 第六十三号』広島大学国語教育会、令和4年3月)。

\*2 信木伸一「新保磐次『中學國文讀本』における『普通文』その2―編者作成教材における文体的試みと三土忠造『中學國語讀本』への改変―」(『国語教育研究 第六十一号』広島大学国語教育会、令和元年3月)。

(尾道市立大学)